

八重山の御嶽信仰習俗覚書

波照間 永 吉

1. 八重山の御嶽(オン)

(1) オンとオンの神

沖縄諸島には御嶽(ウタキ)と呼ばれる聖所がある。この聖所は、沖縄諸島の村落における伝統的な宗教生活上の核をなすものであり、村人は御嶽の神に守護されることで自己の日常生活の平安が保持できると考えた。それゆえ村人は敬虔な心で御嶽の神を祀ってきたのである。

この沖縄諸島における御嶽にあたる聖所を八重山諸島ではオン、ワン、ワー、ウガンそしてヤマなどと称している。オン、ワン、ワー、ウガンは、いずれもオガミ(拝み)からの変化と考えられる。また、ヤマは、その聖所が山丘あるいは森林中に所在することからの名称であろう。御嶽とオン、ワン、ワー、ウガンとの名称の相違は、前者がその聖所の立地する地形による命名であるのに対し、後者はその聖所を祀る人間の行為に因むものであることによる。(1)

御嶽に祀られる神は「村を愛護する祖霊神・島立神・島守神と、祝福をもたらすニライ・カナイの神、航海守護神」などである。(2) 八重山のオン(ワン、ワー、ウガン、ヤマ。以下便宜上、オンを代表的呼称とする)の神も基本的には御嶽の神と重なりつつ、それに加えて水元の神、火の神、豊漁の神、牛馬の繁昌を司る神などの存在を指摘することができるようである。(3)

オンの神には基本的には神名がある。『琉球国由来記』(4)には、76の八重山のオンがとりあげられているが、(5) これらの76のオンにはそれぞれ神名が1つずつ掲げられている。この他、『琉球国由来記』所載のオン以外のオンでも神名の明らかな神がある。(6)

ところで、ここで注目されることは、『琉球国由来記』には八重山の各オンにつき神名とは別に「御イベ名」が掲げられていることである。この「御イベ名」と神名とがどのような関係にあるのか、ということがあまりよく分っていないのである。つまり、『琉球国由来記』の神名ははたして、オンに祀られる

神の名なのかということである。『沖縄文化史辞典』⁽⁷⁾によれば「神名は明らかに御嶽の聖名と見られるが、御イベ名というのは、御嶽に祭られている神の名のようである」という。即ち、神名はオンの聖名であり、イベ名こそがオンの神の名であるというわけである。この問題については比嘉政夫氏の論及⁽⁸⁾があるのでここではこれ以上立ち入らないこととしよう。ただ、オンの神の機能・性格を考えようとする時、オンの神名そしてイベ名は貴重な資料であることを確認しておきたい。

(2) オンの種類

現在、八重山には多数のオンがある。残念ながら、どれだけの数のオンがあるのかということさえも不明の状態であるが、これら多数のオンはいくつかのグループに分類することが可能のように思われる。厳密で精確な分類は今後の課題として、とりあえず、次のような分類ができるであろう。

まず、①オンの管理・管轄のあり方を基準とした分類、②オンの性格による分類、③オンの神の機能・役割による分類、④オンの起源・創設の型による分類、などである。以下概括的にみていこう。

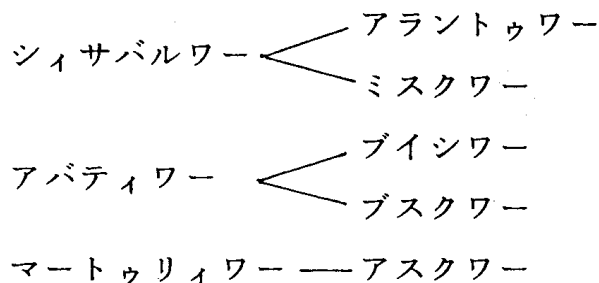
①オンの管理・管轄のあり方を基準とした分類によると、①-a：公儀オン、①-b：村オン、①-c：私的オンの3つに分類できよう。①-aの公儀オンは「古く蔵元の『公儀の御嶽』として尊崇をされた」オン⁽⁹⁾とすることができようが、その管理・管轄に公儀が深く関わっているオンのことである。また、黒島で迎里、ハイフタ、フカイ、ハイカメマ、保里、仲盛、西神山、喜屋武の8つのオンが「この島の『くうじ御嶽』として信仰の中心をなしている」⁽¹⁰⁾ことからすると、あるいは地域によっては『琉球国由来記』記載の、換言すれば王府公認のオンの呼称である場合もあるようである。

次に①-bの村オンは、その管理・管轄が村となっているもので、村落の祭祀が具体的に展開されるオンと規定しておこう。八重山の大多数のオンがそれに含まれる。

①-cの私的オンは、ある一門あるいは個人が創建し、管理・管轄するオンで、大川の長田一門に関する長田オンなどがある。

②のオンの性格による分類の場合は、②-a：本オン、②-b：お通しオン

(遙拝オン) が考えられる。②-aの本オンは、オンの神が来臨・坐すオンである。これに対し②-bのお通しオン(遙拝オン)は、神の坐すオンへ祈願を通すためのオンである。この種のオンが発生するのは本オンが集落から遠く隔っているとか、往来に困難を伴う山中にあるとかいう物理的な問題を解消するための方策であったと思われる。本オンとお通しオンとの典型的な関係は、波照間島におけるピテヌワーと村内ヌワームラウチにみることができるであろう。ピテヌワーの語義は野原・原野のオンということで、集落を離れた野原にある、シィサバル、アバティ、マートゥリィの3つのワーの別称である。波照間島のオンの神はこのピテヌワーに坐すのであるが、集落内からこれらのオンの神を遙拝するために村内ヌワーが創建されているのである。その関係は、



となっている。

この本オンとお通しオンとの関係に類似するタイプがある。これは、本オンの神を分祀し、新たにオンを創設するものである。例えば、宮良のクモーオンは、そのヤマニンジュの本貫の地である小浜島のティダクシィワーの神(神名・テダクシ神花、イベ名・イセルヨフンハユ)を分祀、創設したものである。また、大浜村のブイシオンは、そのヤマニンジュの本貫の地・波照間島のブイシワーの神を分祀し、創設したものと伝えられる。このようなオンを分祀オンとしておこう。

この分祀オンのあり方に類似したものにファーオンがある。ファーオンのファーは子、子供という意で、本オンから特別に分祀して新たに小オンを創設した場合に称される名称である。白保に若干の事例がみられるが、クモーオンやブイシオンなどのような固有名詞はもたず、「〇〇のファーオン」と呼ばれるのが普通である。

お通しオン、分祀オン、ファーオンの性格はそれぞれ若干異なるようである。その細密な検討は後日にゆだね、いまは便宜的に一括して措いておきたい。

③のオンの神の機能・役割による分類は、これまで、先学諸氏によって提示された分類と、基準として一部重なるものであろう。牧野清氏は「御嶽成立の縁起」を検討するなかからオンを9種に分類。⁽¹¹⁾ これに対し、宮良安彦氏は、(イ)村人の素朴な生活から生まれた豊作や豊漁を祈る御嶽。(ロ)村に功績のあった者の墓が拝所になり御嶽となったもの。(ハ)ニライカナイから来臨する神を祀った御嶽。(ニ)旅御願。(ホ)分祀御嶽や遥拝御嶽の5種に分類した。⁽¹²⁾ また、石垣博孝氏も、「①神を迎える場所としてのオン。②自然物や現象(石・木・霊火など)を拝するようになったオン。③すぐれた人の墓が後年御嶽の性格をおびるようになったオン。④特別な職能をもつオン(水元として雨乞い祈願をするところ。旅オンとして航海安全を祈願するところ)。⑤本御嶽から分村、そのほかの理由で設立された分祀オン、または遥拝オン」⁽¹³⁾の5種に分類している。

祭祀名	月(旧暦)	関 係 オ ン 他
種子取祭	1月	クバントゥオン、イヤナシオン
年頭願い	1月	アーマーオン
正月初願い	1月	アーマーオン、イヤナシオン、クバントゥオン、ウシヌオン、イチュムルオン
村御願	1、6、12月	アーマーオン、フナチキオン、海岸、村内、井戸
牛馬初願い	2月	ウシヌオン
二月崇び	2月	アーマーオン
草葉願い	3、4月	アーマーオン、クバントゥオン
ハーリー祭	5月4日	アーマーオン、フナチキオン
山留め	5月6日	アーマーオン
世ぬ首尾	6月	アーマーオン、イヤナシオン、イチュムルオン
豊年祭	6月	アーマーオン、イヤナシオン、クバントゥオン、イチュムルオン
獅子祭	7月16日	アラシクンヤー
八月初願い	8月	アーマーオン
宮良願い	1、8月	宮良村田盛家
芋 祭	9月9日	アーマーオン
牛馬祭	10月	ウシヌオン、イチュムルオン
十月崇び	10月	アーマーオン

<表-1>

これらの分類について論議することは措いて、ここで考えたいのはオン（オンの神）の機能による分類である。即ち、オンおよびオンの神にも個性があるはずであり、その個性・機能によって分類が可能となるはずである。そのことをみるため、試みに登野城の年中行事とその関係オンを掲げよう。〈表-1〉

以上が昭和62年度の祭祀である。この表中に一番よく出るオン名はアーマーオンであるが、アーマーオンは登野城村筆頭の村オンである。いふなれば登野城村の「島守り・島立てのオン」である。それゆえ、年の初めの年頭願いから始まって、ほとんどの祭祀の中心的オンとなるのである。これに対し、イヤナシィ、クバントゥの両オンは稲作伝来と関わりをもつオンとして稲作・農耕関係の祭祀の舞台となり、「稲作豊穰祈願のオン」といえる。また、フナチィキィ（舟着）オンは漁業と深く関わるゆえに、漁民を中心として行なう祭祀の舞台となる。したがって、「豊漁祈願のオン」といえる。ウシィ（牛）ヌオン、イチュムルオンは牧畜関連の由来譚を背景に、牧畜関係祭祀の舞台となっているから、「牛馬の繁殖祈願のオン」といえよう。

このようにオンがそれぞれの機能を有するのであれば、その機能による分類も可能ではないだろうか。ここに例示した考えは、牧野氏の分類の、「火の神を嶽として祀るもの」「牧場の牛馬の繁昌を祈願するために建てられたもの」「水元の神を祀るもの」「豊漁の神を祀るもの」「旅の安全を祈るために建てられたもの」と、宮良氏の(1)・(2)、石垣氏の④の分類と重なりをみせるものである。

④のオンの起源・創設の型による分類は大きく、④-a：神霊発現によるオン、④-b：英雄居住・墳墓地由来のオンに分類できよう。④-aは更に細分できる。例えば先の牧野氏の分類だと、「神の託宣によるとされているもの」「渡来神を祭るとされているもの」「霊石又は漂流石の奇瑞によるもの」などが具体的にあげられる（先に「機能による分類」に掲げた「火の神を——」以下のオンについてもその起源の型を辿れば、上記の3つの型に含みこまれるものであろう）。

この分類を先の宮良氏、石垣氏の5分類に対応させて示すと次のようになる。

宮良分類 石垣分類

- ④オンの起源・創設の型
による分類
- | | | |
|---|----------------------|-----------------------|
| ④ | - a (神霊発現型) ……(イ)(イ) | ①・② |
| | | - b (英雄墳墓地型) ……(ロ)(イ) |

宮良分類の(イ)は各オンの起源を辿れば④-a・bに解消されるものと思われる。

さて④-aにはどのようなオンがあるかという、八重山のオンの大部分がそこに包含されるものであろう。新川のナーサキィオンや登野城のアーマーオンがそうであり、川平のユブシィ (ソニブシィ) オンもそうである。

④-bは新川のマイチィバーオンや登野城のイヤナシィ、クバントゥ、大川のウシャギィの各オン、竹富のニットーオンなどがその代表例である。

(3)『琉球国由来記』収載の八重山のオン

先項でもふれたように『琉球国由来記』には八重山の76のオンと2つの根所が神名、イペ名、由来とともに収録されている。ここで『由来記』記載の嶽名を、現地の呼称と対応させて一覧してみることにする。〈表-2〉

番号	『琉球国由来記』記載の名称	現地呼称
1	宮屋鳥御嶽	ミヤートゥリィオン
2	長崎御嶽	ナーサキィオン
3	美崎御嶽	ミサキィオン
4	天川御嶽	アーマーオン
5	名蔵御嶽	ノーラオン
6	水瀬御嶽	ミジィシィオン
7	白石御嶽	シライシオン
8	崎枝御嶽	サキィダオン
9	糸数御嶽	イトゥカジィオン
10	ヲホ御嶽	ウブオン
11	ヲノミチ御嶽	ミジィオン
12	大城御嶽	ウスクオン
13	コルセ御嶽	グルシオン
14	崎原御嶽	サキィバルオン

番 号	『琉球国由来記』記載の名称	現 地 呼 称
15	仲嵩御嶽	ナカダキオン
16	山崎御嶽	ハマサキオン
17	外本御嶽	フカントウオン
18	嘉手苅御嶽	カチガラオン
19	真和謝御嶽	マージャーオン
20	多原御嶽	タバルオン
21	仲夢御嶽	不 明
22	赤イロ目宮鳥御嶽	アーラオン
23	山川御嶽	ヤマオン
24	稲ホシ御嶽	ンニブシオン
25	浜崎御嶽	キファオン
26	シコゼ御嶽	スクジオン
27	ネハラ御嶽	ネバルオン
28	与那間御嶽	ユナマオン
29	イテホタ御嶽	イリフダオン
30	ネハラ御嶽	ネバルオン
31	野城御嶽	ヌスクオン
32	半嵩御嶽	ハンダキオン
33	徳底御嶽	トゥクスクオン
34	波座間御嶽	ハザマオン
35	仲筋御嶽	ナージオン
36	幸本御嶽	コントウオン
37	久間原御嶽	クマーラオン
38	花城御嶽	パナックオン
39	波レ若御嶽	バイヤーオン
40	国仲根所	ファイナーオン
41	テダクシ御嶽	ティダクシワーン
42	仲山御嶽	ナカヤマワーン

番 号	『琉球国由来記』記載の名称	現 地 呼 称
43	サクヒ御嶽	サクイワーン
44	東御嶽	アールムティワーン
45	迎里御嶽	ンギストゥワーン
46	ハイフタ御嶽	パイフタワーン
47	フカイ御嶽	フキワーン
48	ハイカメマ御嶽	パイカメマワーン
49	保里御嶽	プリワーン
50	仲盛御嶽	ナカムリィワーン
51	西神山御嶽	ニシィカメマワーン
52	喜屋武御嶽	ケンワーン
53	上地美御嶽	ビタキ
54	下地東御嶽	不 明
55	下地西御嶽	不 明
56	三離御嶽	ミチャーリウガン
57	カメ山御嶽	カネマーウガン
58	崎枝御嶽	不 明
59	シタツ御嶽	シタジィウガン
60	ヲカ御嶽	ウカウガン
61	小離御嶽	クハナリウガン
62	与那良御嶽	ユナラウガン
63	友利御嶽	トゥムリウガン
64	ヒナイ御嶽	ピナイウガン
65	西泊大御嶽	ウブウガン
66	干立御嶽	フダティウガン
67	多柄御嶽	タカラウガン
68	浦内御嶽	ウラウチウガン
69	西美崎御嶽	不 明
70	離御嶽	パナリウガン

番 号	『琉球国由来記』記載の名称	現 地 呼 称
71	前泊御嶽	ククウガン
72	成屋御嶽	ナリヤウガン
73	船浮御嶽	フナウキウガン
74	アミ取御嶽	アントゥリィオン
75	ヲハタケ根所	ウチィケーウタキ
76	真徳利御嶽	マートゥリィワー
77	白郎原御嶽	シィサバルワー
78	阿幸侯御嶽	アバティワー

<表-2>

『琉球国由来記』と八重山のオンを考える場合、注目すべきことは、与那国のオンがとりあげられていないことである。1984年の調査⁽¹⁴⁾で、与那国島内に散在する13のウガンを確認したことは貴重な成果である。その13のウガンはトゥヤマウガン、ティウガン、トゥマイウガン、ヌックウガン、ウヤバルウガン、アラガウガン、ナウンニウガン、トゥグルウガン、ディティクウガン、クブラウガン、ンディウガン、ンダンウガン、ウラヌウガンである。オンの構造の変遷の問題を考えようとする時、与那国のオンは有益な資料を提供するであらう。

2. 八重山のオンの構造

(1) 基本的構造について

沖縄の他の地域と比較して、八重山のオンは概して構造が明確になっているといえる。

一般にオンは山、丘、海浜などに立地する他、村内（集落内）にも立地する。いずれの場合も嶽域は樹木が茂り、オンそのものが森や林を形成し、その中に聖域空間が包含されているとみえる。オンのことをヤマと呼称するのも、このような立地に関わってのことと推測される。

これまでのオンの実地調査の成果に立ってオン内部の構造を概括的に述べよう。

まず、嶽域を他の区域と区画する石垣あるいはブロック垣がみられる。これ

は特に集落内にあるオンの場合、ほとんどにみられるものである。しかし、集落をはなれた、森の中にあるオンや竹富、黒島、小浜、新城、波照間、与那国、西表、鳩間島などのオンにはむしろそれがみられないのが普通である。

嶽域正面の入口には鳥居が建てられている。鳥居はほとんどがコンクリート製であるが、西表島や与那国などでは木製の鳥居もみられる。また、鳩間島のオンの神棚に鳥居のミニチュアが奉ぜられていることは、八重山のオンの鳥居の発生についての下の伊波普猷の発言とあわせてみると興味深いものがある。

沖縄の御嶽には一般に鳥居がない。それに対し、近代以前より八重山のオンには鳥居があった。これは八重山のオンの構造の1つの特徴としてとらえられる。その鳥居の発生を伊波は「鳥居は大和在番が任満ちて帰国するとき、海上の平安を祈る為に寄進したもので、那覇駐在の在番奉行が同じ場合に、普天間その他の神社などに之を寄進したものと同一気持の現われだ」⁽¹⁵⁾とみている。八重山における大和在番の制度は、1641年に設けられたが、7年後の1648年には廃止されたのであるから、その間に伊波の説くような形で八重山にひろく存するオンの鳥居のすべてについて説明することはむつかしいのではなからうか。

この伊波説に対し、牧野清氏は「寄進だけでは離島まで深く浸透している事実は説明し難いように思う。私は神域の象徴として権現堂にならい、大和文化の著しく触発されたあの頃の時代的背景の下に、島民自からが進んで御嶽に鳥居を建てたと思う。それなればこそ、群島の各島々まで浸透したに違いないと考える」⁽¹⁶⁾八重山のほとんどのオンが鳥居を有する事情はおそらく牧野氏の説くように民衆的活動によるものであろう。しかし、例えば、現在もオン信仰を固く保持する波照間のオンがいずれも鳥居をもたないことなどは、鳥居の設置を日本同化のシンボルとする、近代以後の思想的な動きもまたあったことを考えさせる。いずれにせよ日本文化の摂取例である。

鳥居を入ると神庭となる。神庭はミャー、メーなどとよばれる。メーは大きな庭、広場の意である。村の祭祀で神への奉納の芸能が演ぜられるのはこの庭である。そのため、この庭には舞台（バンク、バンコー）がしつらえられている例もあれば、井戸などがある場合もある。清浄な海砂やウル（枝珊瑚の碎片）などを敷いてあるのが一般的である。なお、ミャーと宮の関わりについて

は宮良当壮「ミヤ（宮）の原義に関する研究」⁽¹⁷⁾があることを付言しておく。

ミヤの中央部付近に拝屋・拝殿がある。この建物はオンヤ（御嶽の家）、パイデン（拝殿）などと呼ばれる。現在、オンのほとんどにこの建物はあるが、波照間のピテヌワヤ、与那国の十嶽神社を除く他のウガンにはそれが無いことに典型的にみられるように、本来は存しないものであったらしい。図2は小浜のコーキオンであるが、神庭も未発達で、オンヤ（パイデン）もない。また、図3の与那国のナウンニウガンはオンヤ（パイデン）はないのであるが、神庭の後方に小祠が造られている。この祠は人の入れるようなものではなく、祠の床が神棚として使用されている。

オンヤ（パイデン）は屋根付きの建物で、中には神棚が設けられている。神棚はイベに坐す神への祈願をお通しするためのもので、祭祀の場合、まず神棚に願意を告げて後、イベを拝むのが一般的のようである。神棚には香炉、花瓶、湯呑み茶碗の他、水入れ用のコップや灰皿（シャコ貝の殻）などの祭具が定式に従って配置されている。また、神棚の後壁には円形・楕円形の格子窓、扇形の小窓が一様に設けられている。これはイベへのお通しの窓である。

オンヤの中には、オンの神の徳を讃えた句を書いた扁額や聯の他、嶽名を大書した扁額などが掲げられている。このしきたりが近代以後のものでないことは、白保のハティルマオンに掲げられた「波照間嶽」の扁額が乾隆58年（1793年）に奉納されたものであることから分る。

なお、オンヤに複数の神棚がある場合は、それぞれ別々の神への祈願のために設けられたものである。

神女が祭りの際に夜籠りするのもオンヤ（パイデン）である。オンヤに付属して煮炊き用のカマドをしつらえたところもある。

オンヤ（パイデン）の後方にイベがある。イベは嶽域内でも更に聖別され、石垣で囲われている。図1・4・5に明瞭にそれがうかがえよう。この石垣で区画された域を便宜上イベ域と称すことにする。イベ域の正面に石積みの門がある（アーチ型の場合が多い）。その門より奥へは神役の女性しか立ち入ることはできない。この門の下には香炉などが置かれ、イビヌマイ（イベの前）、（ナカイビ〈中イベ〉、ナカドゥリィ〈中取り〉などと称すこともある）という拝所である。カンマンガー、ティジリビ（手摺り部）などと称される男

性神役のイベへの祈願はここでなされる。

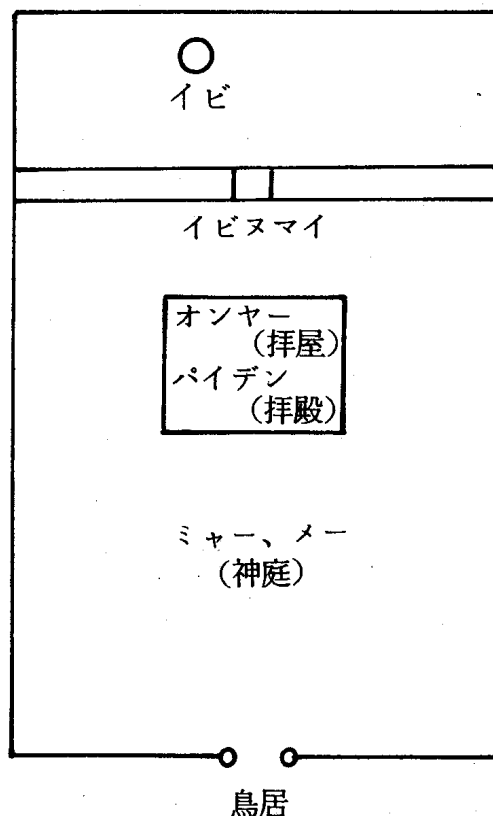
宮良では、このイベ域のことをペーダといい、その門口の拝所をペーダヌマイと呼ぶ。ペーダの語義については不明。

イベ域の最奥部にイベがある。イベはイビ、ウブ、オボなどと地域によって呼称に若干の異りがあるが、この地こそが聖域中の聖域である。オンの神はここに坐すわけである。イベにはオンの神の神体として巨岩や高さ1メートルにもみたない海石（石灰岩）があったり、大木が生えていたりするが、これらの神体の存在しないオンもある。お通しオンなどには勿論のことながら神体はない。

イベには香炉が置かれているが、祠を設けてその中に香炉を置いてある場合もある。

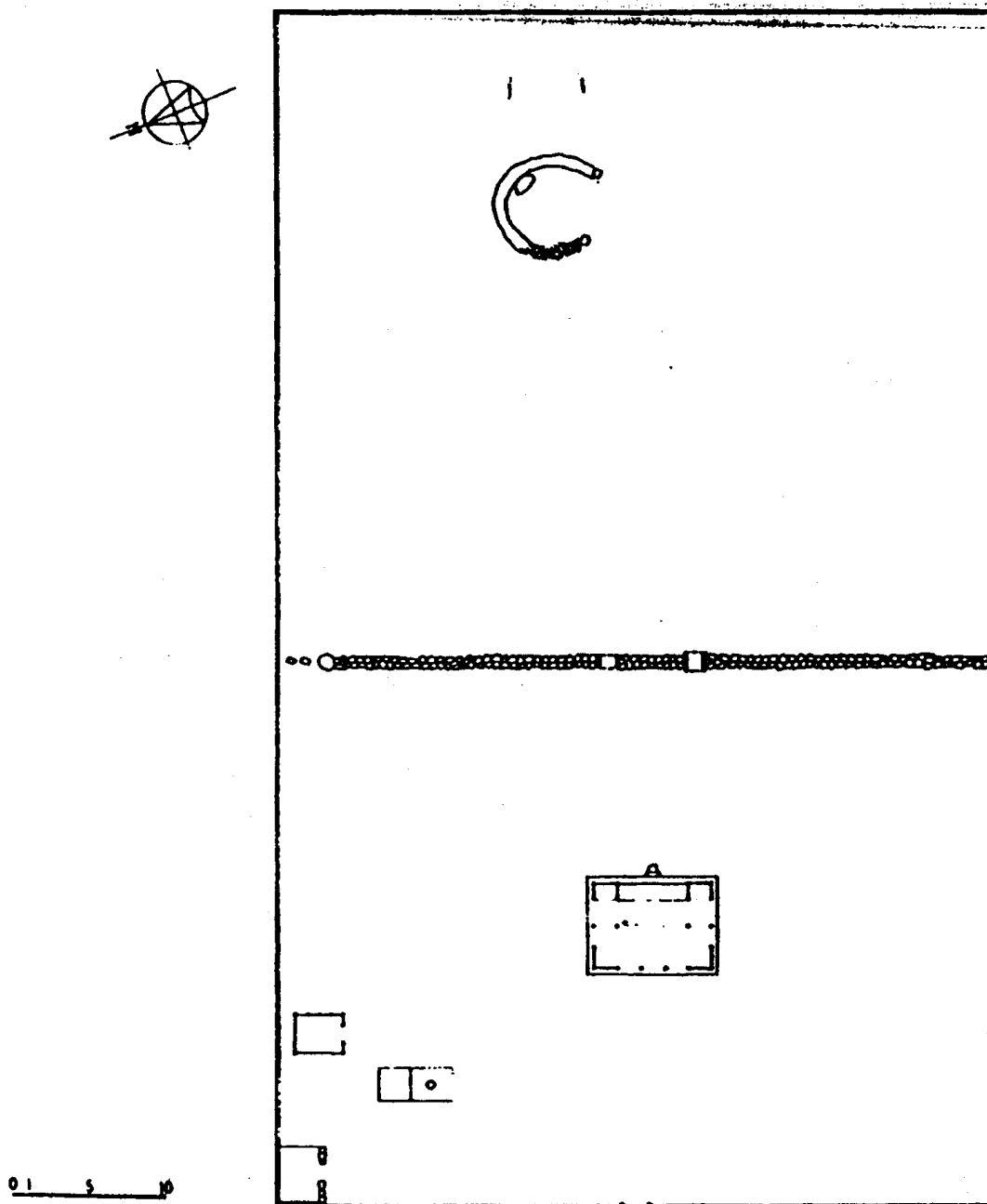
イベは不可穢の聖空間である。これまで、オンの模式図に鳥居からオンヤ（オンヤの神棚）そしてイビヌマイ、イビを一直線上に配置してきた。しかし、これまでの調査で、それは誤りであることが分ってきた。つまり、イベは衆人の目から隔絶される必要があり、イベ域をことさらに石垣で区画するのも、実はそのためではないかと考えられる。イベ域を囲いつつ、更にイビヌマイからも直視されない位置にイベの香炉は置かれている。これは図1のミサキオンでもみられるのであるが、宮良の各オンはその典型的な構図を示してくれる（図5＝クモーオン）。クモーオンのペーダヌマイに立ってもウブ（イベ）の様子はうかがえないようになっているのが分るであろう。このような構造が、基本的に、八重山のオンにみられるのである。そして、それはイベの聖性という信仰的世界と深く結びついたあり方と考えられる。

以上がオンの基本的な構造についての概略である。これを図示すると右のようになる。

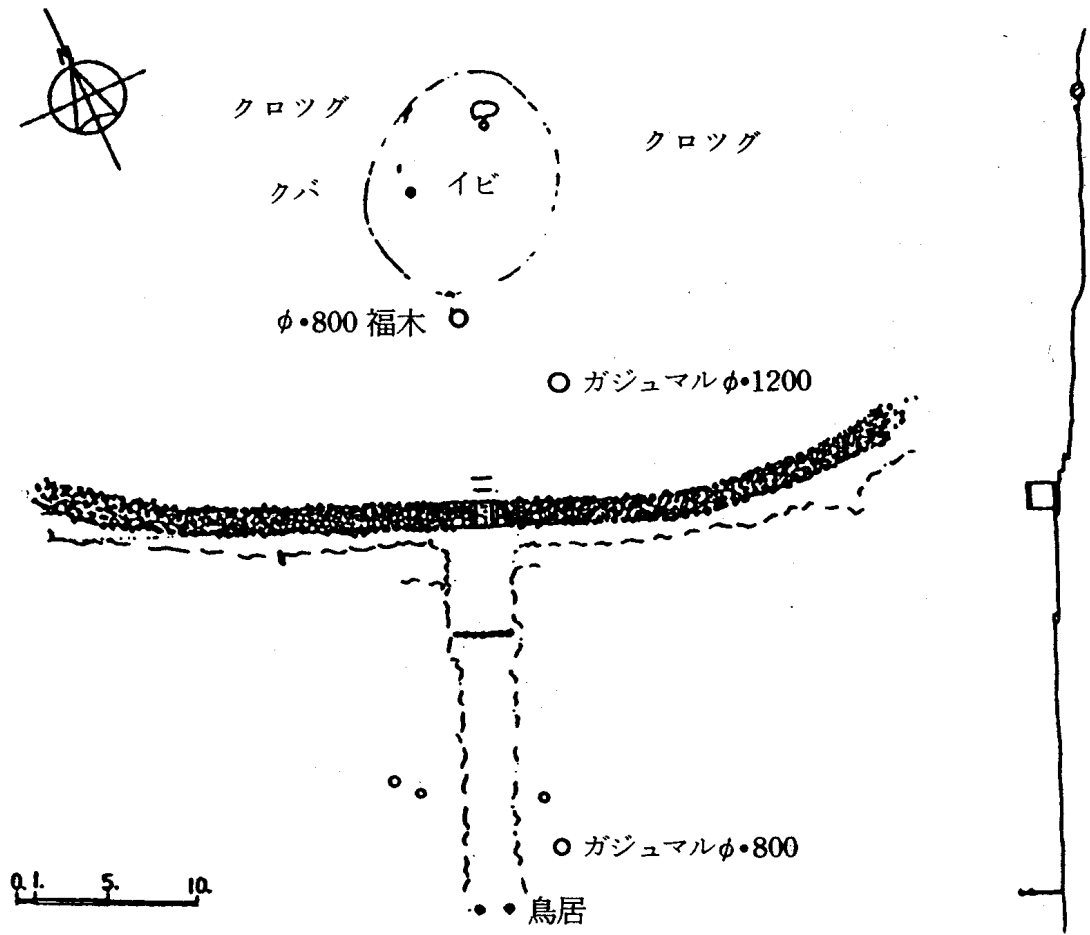


最後に墳墓地由来のオンについて簡単にふれよう。

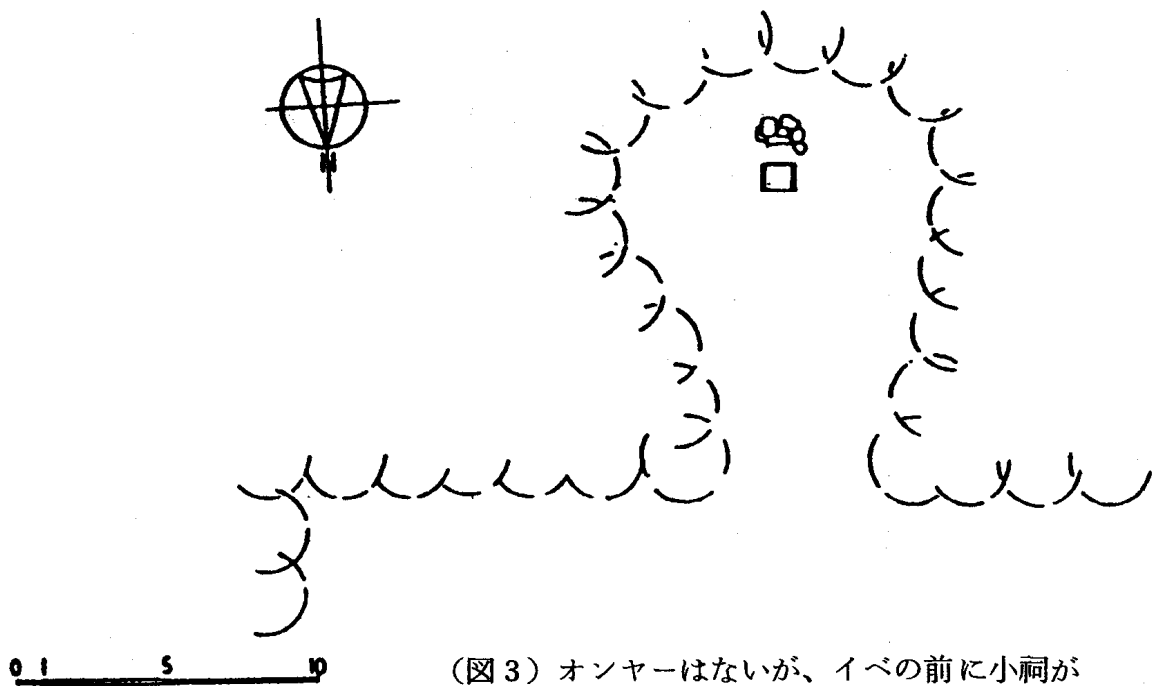
前節で英雄墳墓地型と分類した型のオンも基本的な構造は神霊発現型のオンとかわらない。しかし、そのなかにあって、英雄墳墓地型のオンの大きな特徴は、神霊発現型のオンのイベに相当するところに、英雄の墳墓が位置していることである。その墳墓は、例えば、マイチバーオン、ウシャギオン、ニシトオンでみると、珊瑚石灰岩を直方体につみあげたもので（図6参照）、一見して、それが他の型のイベとは大きく異なることが分る。これが英雄墳墓地由来のオンの特徴である。



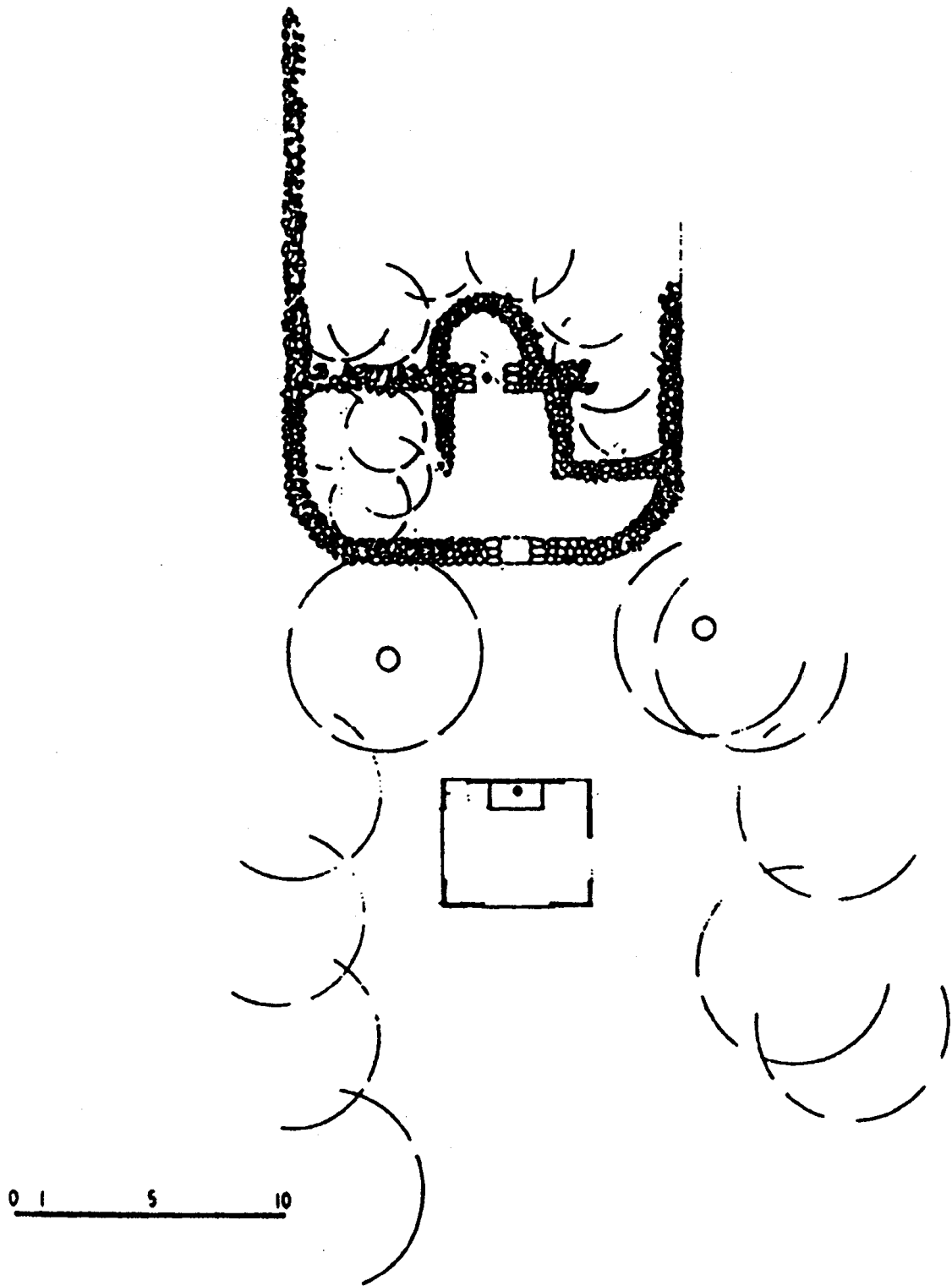
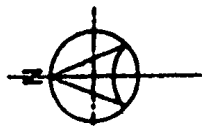
(図1) オンの構造を典型的に示すミサキオン（登野城）。



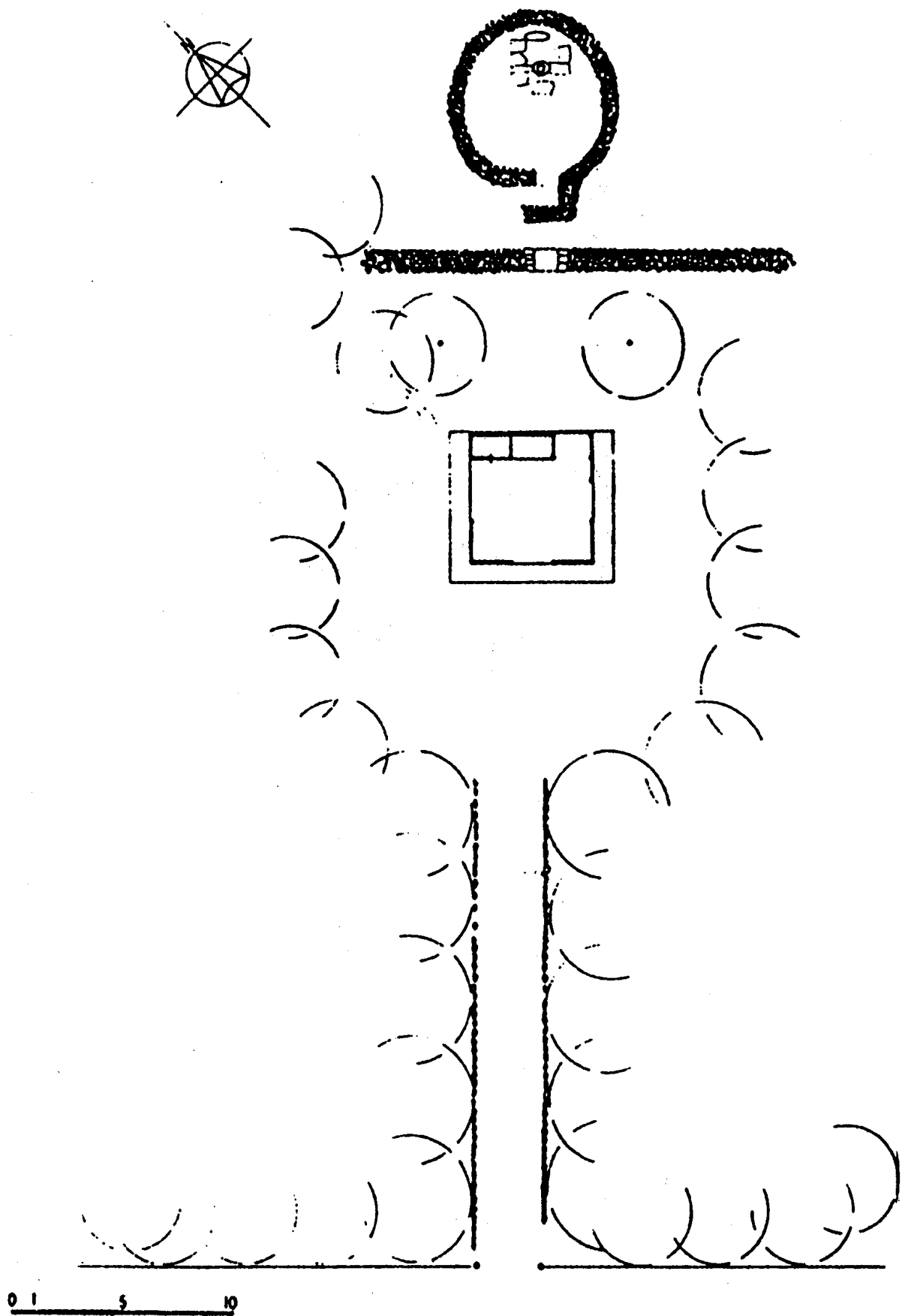
(図2) オンヤー (パイデン) のないコーキオン (小浜島)。



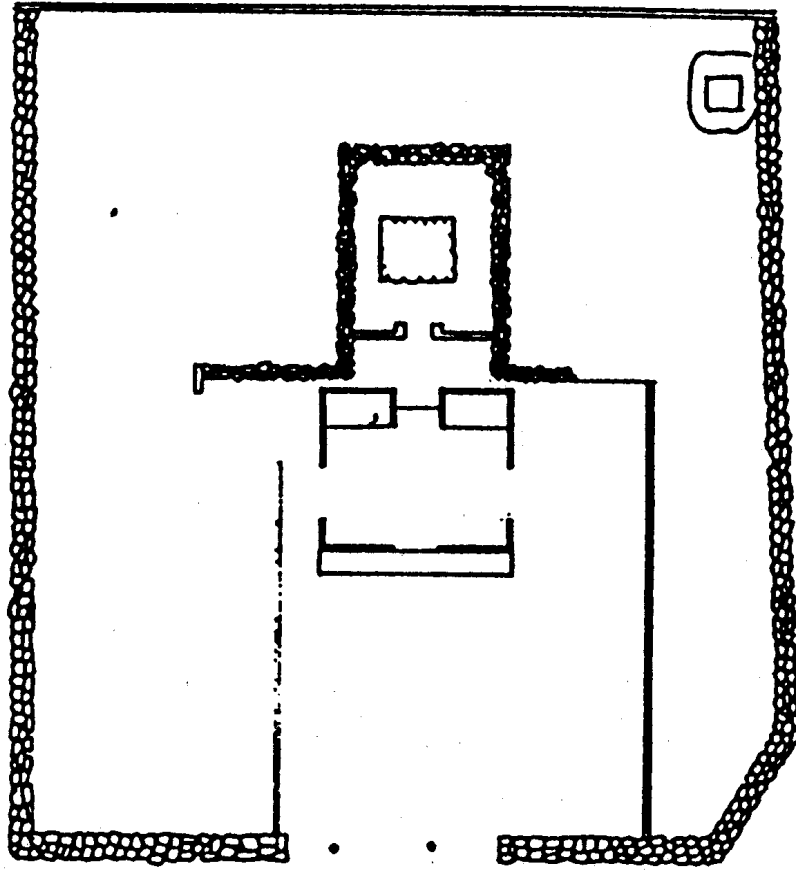
(図3) オンヤーはないが、イベの前に小祠が作られているナウンニウガン (与那国)。



(図4) 嶽内でもさらにイベは聖別される。イリフダオン (桴海)。



(図5) クモーオンのペーダとサブ。



(図6) マイチバーオンのイベ。イ
ベ城中央はマイチバーの墳
墓。

3. オンの祭祀者と年中祭祀

(1) 祭祀者と祭祀集団

オンに齋ぎ、その神を祀る最高の最祀者はチィカサ（司）と呼ばれる神女である。チィカサは日本語の「つかさ」に対応する語で、オモロでも「いべ」の対語として「つかさ」が用いられている。王国時代の高級神女である「三十三君」の1人に「司雲上」（ツカサクムイ）がいるが、この神女名のツカサが八重山のチィカサ（宮古でも神女のことをツィカサ、ツィカサム^マなどという）と重なる。職能的には沖縄諸島のヌル（ノロ）にあたるといってよいだらう。カンチィカサ（神司）ともいう。

このチィカサがオンの神と人間をつなぐ役割を担うのである。古くは、神の妻として純潔を求められ、未婚のままで神に仕えなければならないといわれたという。その残映が、チィカサはチィカサ墓に葬せられるという民俗となっていたのであろうか。

チィカサはオンの祭祀には神衣裳（白朝衣）を着け、カンヨージィ（神楊子＝簪）を挿して神を祀る。イべの中に入り、神を祀るのはチィカサである。

チィカサの下役にバギィチィカサ（脇司。単にバギィともいう）がいる。職務としては、チィカサの祭祀執行の補助役である。

この2つの神役はオンと関わりのある家系からでるのが一般的である。

チィカサ、バギィチィカサの神女の他に、バガチィカサ（若司）と呼ばれる神女もいる。この神女はチィカサの見習いであり、血筋は特に問題とされない。

川平ではティナラビ（手並べ）と称する女の神役がある。この役は「神元屋の系統の女性」で「神司の次位に値いする」。(18)

波照間、白保ではパナヌファ、タカヌファと称される神女がいてチィカサの下位でチィカサを補佐している。

また、宮良村では、仲嵩、山崎、外本、小浜の4オン以外の神女はニガイビー（願い部）と呼ばれ、かつては、チィカサとの間には神衣裳などに差異を設けるようになっていたという。

竹富島の神女組織は、その最高位にフーチィカサ（大司）がおり、その下に

シィンヌチィカサ（次の司）、そしてカングナジィ（神女）又はバシィチィカサ（脇司）がいて、カンヌファー（神の子）、スティヌファー（袖の子）、ニガイピトゥ（願い人）という階層構造をなすものであった。⁽¹⁹⁾

一方、男性の神役もある。それはカンマンガー（大浜、平得他）、ティナラビ（鳩間、竹富他）、ティジリ（黒島）などと呼ばれる神役であり、「御嶽の保護管理、チィカサの祭祀儀礼の場を整えたりする」⁽²⁰⁾ ヤマアタリィ（山当。ヤマ＝オン担当者の意。宮良）、ムラブサー（村補佐。波照間）などである。これらの神役は特定の血筋を引く家柄、あるいは多数のヤマニンジュより1人だけ選出される役である。

これに対し、一般の氏子にあたる人々をヤマニンジュ（山人数。ヤマ＝オン構成員）という。波照間島では「7歳から73歳まで」の「ムラニンジュのうち15歳から50歳までのフダニン（生産人）をいい、ムラニンジュの当該部落居住者のうち、島民の血を引いている者、島民との婚姻、縁組などを通じて居住定着しているものが、必然的に加入することによって構成されている部落単位の集団」⁽²¹⁾ という。

上記の神役とは別にトゥニムトゥと呼ばれる役がある。竹富では「氏子の総元帥であって、神山の祭りの直接の執行責任者である。神山を創設し、部落を創立した神々の家系で世襲している」⁽²²⁾ 一般に村の宗家とされる。

竹富ではトゥニムトゥの下に「オンをさ」がおり、「神山に関する諸事を執行する」役を担う。⁽²³⁾

(2) オンの年中祭祀

オンの年中祭祀は、村落の伝統的な生活のリズムに従い、長年にわたって形成されてきた。その生活のリズムとは稲作を中心とする農業生産のこよみであって、沖縄における年中祭祀は稲作農耕にかかる豊穰祈願と除災が基本となっているとみられる。

八重山のオンの年中祭祀もそうで、現在にいたるまでその基本的骨格は保持されているとみられよう。もっとも、かつては多数を数えた年中祭祀も、近代、特に戦後の生産構造及び生活様式の変化により年々姿を消しつつあるのが実状である。このオンの年中祭祀の衰滅は、とりもなおさず御嶽信仰習俗の変

化に到るものであり、注意深く見守ってゆく必要があるであろう。

ここでは、オンにおける主な年中祭祀について語義を中心に、ごく大まかな説明を施すこととする。(24)

○ ションガジニントウ (正月年頭)

正月の年頭の拝礼のこと。1月1日に行う。オンのヤマニンジュの無病息災、農作物の豊穰祈願を行う。

○ ションガジユニガイ (正月世願い)

正月の世願い。ユニは豊穰、豊饒のことで、そのユニをオンの神に祈願する。五穀豊穰の祈願。

○ タカビ (崇べ)

稲作の願い。作物の播種、植付けを終了した報告と、作物の成育を祈る祭祀。タカビは崇べで、神を崇め、祈願する意。いわゆる二月タカベ。

○ フサバムヌン (草葉物忌)

稲の葉が順調に成育するようにとの祓いで、虫害及び風水害のないこと、また降雨などを祈るための物忌。虫払いが行われる。

○ プーヌムニン (穂の物忌)

稲穂の物忌。稲穂の成育がつつがないように祈る。

○ ウフラシムニン (ウフラシ物忌)

ウフラシは地名で、「稲、粟、黍等の農作物の取り入れが間近で村近くまで来た」ことをこの土地名をあげて示す。豊穰の祈願と天候の好順を祈る。

○ スクマンカイ (初穂迎え)

稲の初穂祭。スクマは、沖縄諸島のシチュマ、ツマ、シキュマと同じで稲の初穂をまつり、それを迎える祭祀。

○ ルクガジユニガイ (6月世願い)

6月の豊穰願い。6月のユニガイはユースシュビ(世の首尾)といわれ、首尾、すなわち「五穀豊穰と住民の健康の感謝」祭である。

○ フーナアギ・オンプーリィ (穂花上げ・御嶽豊年祭)

穂花上げは、稲の収穫感謝のために稲穂を神に上げること。オンでおこなわれるプーリィ(豊年祭。プーリィの語義未詳)であるからオンプーリィと

いう。豊年をオンの神に感謝する、年中最大の祭祀。

○ ユーニガイ・ムラプーリィ (世願い・村豊年祭)

来年の豊穰祈願。ムラプーリィはオンプーリィに対するもので、翌年の豊穰を祈願する祭祀。

○ パチィガジューニガイ (八月世願い)

八月の豊穰願い。これからの1年の豊穰祈願。

○ ミジィニガイ (水願い)

水の神に対する湧水の祈願。井戸水、湧水、流水、堰の水をつかさどる神への祈願が主という。

○ クニチヨイ (九日祝)

九月九日の祝。芋(甘藷)のお初を神にさし上げる。ヤマニンジュの健康祈願を行い、菊酒を飲む。

○ シチィ (節)

節のあらたまりを祝う。正月にあたる。部落民一同の健康祈願、除災招福を祈る祭祀。

○ タカビ (崇べ)

いわゆる十月タカベ。火の用心を主旨とする。

○ タニドゥリィ (種子取り)

稲の播種儀礼。「種子取は1ヶ年のウフスクル(大作)といい、苗の出来、不出来が豊凶につながることからナイノウルド マアノウル(苗の好いのが稲の稔りにつながる)といわれていた」から、タニドゥリィは極めて重要な祭祀であった。

○ ニンヌシュビ (年の首尾)

年の首尾、すなわち1年の祭祀に対する神の加護への感謝祭。

以上が宮良村のオンを中心とする年中祭祀のあらましである。1月から12月まで、7月を除いて(7月は祖先供養祭があり、神祭りは避けられる)毎月のように祭祀がとりおこなわれ、生産活動と村落生活の各部に御嶽信仰が息づいていることが分る。

沖縄の村落における宗教的生活の核を占めてきた御嶽信仰は、人類学、民俗

学の研究領域であるだけでなく、文学、芸能研究などとも深くかかわるものである。本稿は沖縄古代文学を研究しようとするとき、どうしても避けて通ることのできない御嶽信仰について、八重山の臨地調査で得られたその概略的なことについてふれた。

南島の祭祀歌謡の構造、祭祀及び祭祀者と祭祀歌謡のかかわりといった問題にアプローチするためには御嶽信仰習俗の内側に深く入りこまなければならない面がある。今後の課題とするところである。

〈注〉

- (1) 仲松弥秀氏は、奄美以南八重山にいたる聖地の「総称として〈御嶽〉名称を与えたのは首里王府であろう」とする(『沖縄大百科事典』「ウタキ」の項)。ただ、『おもろさうし』に、アカラタケ、オホツタケ、クモコタケ、中クスクタケ、ヤラサタケなどの他多数の嶽名がみえている他、「たけ(嶽)」「たけへ(嶽々)」などが「もり(杜)」と対語で出ていることは注目してよい。
- (2) 仲松弥秀「御嶽 ウタキ」(『沖縄大百科事典』 1983年・沖縄タイムス社刊)
- (3) 牧野清「御嶽信仰について—その歴史的考察—」(『琉大史学』8号)によると、
「八重山に於ける御嶽成立の縁起は、
 - ◁神の託宣によるとされているもの
 - ◁渡来神を祭るとされているもの
 - ◁開拓者又は共同社会の貢献者を神としてその墓を祀るもの
 - ◁霊石又は漂流石の奇瑞によるもの
 - ◁火の神を嶽として祀るもの(ピィナカンオン)
 - ◁牧場の牛馬の繁昌を祈願するために建てられたもの(ウシィヌオン)
 - ◁水元の神を祀るもの(ミジィムトゥヌオン)
 - ◁豊漁の神を祀るもの
 - ◁旅の安全を祈るために建てられたもの(タビオン)
 など千態万様であるが、御嶽は元来自然神が多く、後次第に人格神も祀られるようになったのではないかと考えられる」とされる。
- (4) 1713年成立。首里王府編。テキストとしては、伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書』(1972年・東京美術刊)本を用いた。
- (5) 『琉球国由来記』には、国仲根所(竹富)とヲハタケ根所(西表祖納)の2ヶ所を加え「八重山島御嶽」とする。但し、両根所は厳密にはオンではなく、両所ともに「神名ナン」とされる。

- (6) 例えば、ウシャギオン、ギシュクオン、クモーオン、マイヌオンなど。これらの他墳墓起源のオンについても神名は明らかになっている。
- (7) 琉球政府文化財保護委員会監修、真栄田義見・三隅治雄・源武雄編『沖縄文化史辞典』（1972年・東京堂出版刊）。
- (8) 比嘉政夫『琉球国由来記』にみる地域差—御嶽の神名などをめぐって—（『南島—その歴史と文化—』1 1976年・国書刊行会刊）。
- (9) 牧野清・注(3)論文。牧野氏はその例としてミシャギオンをあげる。なお宮良村の例では、仲嵩、山崎、外本、小浜の四御嶽が「村公事御嶽」にあたるという。ここでは、『由来記』に載っていない小浜オンがあり、『由来記』に載っている山崎オンがはずれている（『宮良村誌』・1986年・宮良公民館刊）。
- (10) 植松明石「先島の御嶽をめぐって」（『沖縄文化論叢』3 民俗編Ⅱ。1971年・平凡社刊）。
- (11) 牧野清・注(3)論文。
- (12) 宮良安彦「石垣島・川平諸御嶽の由来と群星御嶽の神口」（『沖縄文化』36・37号）
- (13) 石垣博孝「オン〔御嶽〕」（『沖縄大百科事典』・1983年・沖縄タイムス社刊）。
- (14) 1984年7月～1985年1月、沖縄県教育委員会の行なった「御嶽信仰習俗分布調査」（調査員・玉城政美氏、玉城義実氏、大城学氏、波照間永吉他）。この調査の成果は『御嶽—御嶽信仰習俗分布調査（Ⅱ）—宮古諸島及び八重山諸島』（1985年・沖縄県教育委員会）にまとめられている。本稿は基本的に同調査の成果の上にならている。
- (15) 伊波普猷「日本文化の南漸」（『伊波普猷全集』第5巻。1974年・平凡社刊）
- (16) 牧野清・注(3)論文
- (17) 宮良当社「ミヤ（宮）の原義に関する研究」（『南島叢論』1937年）
- (18) 川平公民館編『川平村の歴史』（1976年・川平公民館刊）
- (19) 崎山毅『蠅螂の斧』（1972年・自家版）
- (20) 宮良村誌編集委員会『宮良村誌』（1986年・宮良公民館刊）
- (21) 加屋本正一『波照間島』（1978年・自家版）。
- (22～23) 崎山毅・注(19)書参照。
- (24) 石垣市字宮良の年中祭祀をとりあげる。なお、この項の記述は『宮良村誌』に大きくよっている。
- 付記・本稿に掲げたオンの図面は玉城義実氏の作図になるものである。記して感謝申し上げます。